

# 「文学革命」から「革命文学」の時代への転換(下)

——馮乃超の日本におけるマルクス主義文芸理論の受容——

工藤貴正

(上)

はじめに

1. 馮乃超の生い立ちと日本での学習経歴の概略(1901-1927)
2. 唯美的象徴主義としての大正生命主義への傾倒そして終焉
  - (1) 創作集《傀儡美人》と《撫恤》の作品を例に
  - (2) 芥川龍之介作品が醸し出す個人主義文学の終焉

中 結

(下)

3. 「集団主義」文学の実現と「本物のマルクス主義」へと向かう時代の転換期
  - (1) 「革命文学」の提唱の背景に存する日本の無産階級運動の潮流
    - (a) 「革命文学」論争の展開と中国共産党の関与による終結
    - (b) 「日本無産階級運動発達史」に読み取る日本の無産階級運動の分裂
  - (2) 「本物のマルクス主義」以前の多様なマルクス主義理論容認の時代

おわりに

## 3. 「集団主義」文学の実現と「本当のマルクス主義」へと向かう時代の転換期

### (1) 「革命文学」の提唱の背景に存する日本の無産階級運動の潮流

1923年9月1日、関東大震災が発生当時、東京のキリスト教主義学校青山学院には二人の台湾人留学生が在籍していた。

一人は張深切(1904-1965、台中南投人)で、彼は青山学院中学部3年に在籍していたが、震災発生当時、肺炎を患い台湾に戻り休養しており、青山学院の被害が甚大であることを知ると、父親を口説き落として中国へ転居して学問を続けることとなった。その年の年末に上海に到着して以降は、張深切は中国

大陸と台湾で活動していたので、関東大震災後の日本の大きな社会変動を直接には体験していない。

もう一人は劉呐鷗（1905-1940、本名劉燦波、台南新営人）で、彼は1920年4月台南長老教中学（現在の長栄高級中学）を退学し、青山学院中等部3年に編入、1923年3月卒業後、4月に同校高等学部文科「英文学専攻」に進学する。この年の9月に関東大震災を体験し、震災後も日本に留まり、1926年3月に青山学院高等学部を卒業し、1926年4月に上海に転居し震旦大学法文特別班に転入学している。この時に、戴望舒（1905-1950）、施蛰存（1905-2003）等と知り合い、彼らと一緒に現代主義作家の紹介に尽力し、劉呐鷗は日本の新感覚派作家の作品と現代日本文壇思潮を上海に導き入れた<sup>1)</sup>。

上述したように、劉呐鷗は関東大震災後の日本社会の激変を体験した人物であり、その彼が日本の新感覚派作品とプロレタリア文学作品を翻訳、刊行した『色情文化』（上海・第一線書店、1928.9初版）の『『色情文化』訳者題記』（1928年7月12日付）の中で、当時の日本文壇の状況を次のように説明する。

現代の日本文壇は個人主義文芸から集団主義文芸へと向かう転換期にある。その流派は複雑で、個人の心的境地を重視する心境派あり、英雄主義を掲げる人道派あり、新現実主義の中間派あり、左翼の未来派あり、象徴の新感覚派ありだが、一方で、旋風のように日本の文壇全体には“プロレタリア”文芸が席卷した。

馮乃超は劉呐鷗と同時期に日本に滞在しており、彼も日本の時代転換の息吹を感じ取っていたことだろう。1927年10月、11月に日本から上海に戻った創造社の新しい成員——馮乃超、李初梨、彭康、朱鏡我や李鉄声等は、時代精神の欠如を既成文壇に感じ取り、新時代の自負する青年の不満として文壇の大創所である魯迅らに向けられても何ら不思議ではなかった。

#### (a) 「革命文学」論争の展開と中国共産党の関与による終結

馮乃超「芸術与社会生活」『文化批評』創刊号、1928.1.15

馮乃超たち新メンバーは、『創造月刊』だけでは飽き足らず、無産階級文学

の建設を目指す自分たちの雑誌『文化批評』を1928年1月に創刊した。同雑誌の中、魯迅の文学や彼の人道主義に対する批判は次のような揶揄で始まった。

魯迅というご老体——私の取る文学的表現をお許し頂けるなら——は、いつも薄暗い酒屋の楼上から、酔眼陶然として窓の外の人世を眺望している。世人が持つ嘆す彼の長所は、ただ円熟した手法という一点にすぎない。しかし、彼がたまに懐かしむ過ぎ去りし昔日は、没落した封建情緒の追悼であり、結局彼が映し出すのは社会変革期の中の落伍者の悲哀であり、彼の弟（周作人—筆者）とやるせなさそうにかわす人道主義の美辞麗句でしかない。隠遁主義！ 幸いにも、L. トルストイのような下劣な説教家にはならなかったが。

さらに、馮乃超はレーニン著作の一節を引用して、「トルストイは、一方で資本主義の搾取を忌憚なく批判し、政府の暴力を暴き、裁判と行政の喜劇的な仮面を剥ぎ取った。つまり、国富の増大や文化の結果と貧困の増大や労働大衆の苦痛との間にある矛盾を暴露している。彼は他方で暴力によって罪悪に反抗してはいけなくと愚かにも人を諷めている。一方では、最も覚醒したりアリズムに立って、一切の仮面を剥ぎ取れとしながら、他方では、厚かましくも世界で最も下劣な宗教の説教家となっている」とトルストイを批判した上で、彼らのような知識人は、「資本主義社会の偽善者で無ければ、Don Quixoteの類の人道主義者である」と批判した。すなわち、馮乃超は、トルストイ主義のような無抵抗な人道主義と、キホーテのようなその時その場の個人的善意の人道主義を意味がないと批判したのであった。

#### 成仿吾「從文学革命到革命文学」『創作月刊』第9期、1928.2.1

一方、馮乃超ら日本在住の左翼留学生を熱心に創造社に勧誘した成仿吾は、1928年2月1日発行の『創造月刊』第9期に「文学革命から革命文学へ」を書いて今後の中国文学の向かうべき未来を提唱した。彼は、辛亥革命以来の新文化運動の流れの中で文学革命の歴史的意義を振り返り、これからの新文学は

「革命文学」へと進み、「努力して弁証法的唯物論を獲得し、努力して唯物論的弁証法の方法を把握すると、それが君に正当な指導を齎し、君に必勝の戦術を提示するだろう」と語る。そして、「Intelligentsia インテリゲンチャ」（智識階級）、「Aufheben アウフヘーベン」（揚棄）、「Ideologic イデオロギー」（意識・観念形態）などの新語を交えながら「革命的な“インテリゲンチャ”は団結せよ、君たちの手かせ足かせを失うことを憂えることなかれ！」と檄を飛ばしている。

#### 李初梨「怎樣地建設革命文学」『文化批判』第2号、1928.2.15

李初梨は1928年2月15日発行の『文化批判』2号に「如何にして革命文学を建設するか」を発表した。同号には馮乃超がアプトン・シンクレア (Upton Sinclair, 1878-1968) の「拝金芸術」(Mammonart) に所収の「芸術家は誰の所有か?」(Who owns the Artists?) を翻訳し、その「前文」で、シンクレアは「我々と同じ立脚地に立って芸術と社会階級の関係を闡明している。……彼は芸術の階級性を喝破したばかりでなく、今後の芸術の方向を闡明した」と書いた。李初梨はこの一文を受けて、本論の一節「文学とは何か」の中で、「Upton Sinclair は‘拝金芸術’ (Mammonart) の中で、大胆に語った：一切の芸術はすべて宣伝である。普遍的に、しかも不可避免的に宣伝である。時には無意識だが、大抵は故意な宣伝である」と述べた文章を引用し、「芸術」を「文学」に替えて、「一切の文学は宣伝である」と宣言する。そして、李初梨は、「革命文学は当然プロレタリア文学」、「我々の作家は‘革命のために文学する’のであって、文学のために革命するのではない」という「動機」さえ明確に有りさえすれば、「ひとりの作家は、第一階級であろうが、第二階級であろうが、第百階級、第千階級の人であろうが、誰でもプロレタリア文学運動に参加することができる」と語る。さらに、「我々の作品は、‘芸術の武器より武器の芸術に到った’」ので、「プロレタリア文学の形式」は「風刺的」、「暴露的」、「扇動的 (Agitation)」、「指導的無産文学」であると語り、最後に、「闘争の過程はすなわち革命文学の発展の過程である！」と檄を飛ばして締めくくっている。

魯迅「“醉眼”中的朦朧」(『語絲』4巻11期、1928.3.12、『三閑集』所収)

魯迅はこれらの文章を受けて「「醉眼」の中の朦朧」を書いて以下のように反駁する。

- ・革命者は決して自己批判をおそれない、なぜなら、彼は認識が鮮明で、恐れずに明言するからである。ただ中国だけは特別であって、人に追従してトルストイを「下劣な説教者」とオウム返しする理解があっても、中国の「目前の情況」については、ただ「事実、社会の各方面は暗雲で遮る勢力に支配されている」と感じるばかりで、「政府の暴力を暴き、裁判と行政の喜劇的な仮面を剥ぎ取った」トルストイの勇気の何分の一すら持っていない。人道主義が不徹底であると解っていても、「人を殺すこと草の如くして声を聞かず」という時代なのに、人道主義式の抵抗すらしないのである。
- ・もし「最後の勝利を保障する」のが難しい場合は、逃げるのであろうか？ この点、成仿吾に祝福されて、やはり今年生まれた『文化批判』誌の李初梨の文章のほうがまだましである。思いきったプロレタリア文学の主張なのだが、プロレタリアが書き手である必要はなく、どんな階級の出身であっても、どんな環境におかれていても、「プロレタリア階級の意識によって生み出される闘争の文学」でありさえすればよいのだから、きわめて明瞭実直である。
- ・その後、李初梨が「作家は、たとえ第一、第二……第百、第千階級であろうと、プロレタリア文学運動に参加することができると私は思う。ただし我々は彼らの動機を前もって審査する必要はあるが。……」と語っているのを目にして、ちょっと安心した。ただし、私にとって心配なのは依然として階級を問題にしていることである。「有閑すなわち有錢」だとすると、無銭だったら第四階級のはずだから、「プロレタリア文学運動に参加」できるはずである。だがそのとき今度は「動機」が問題になることがわかった。要するに、もっとも肝心なのは「プロレタリア階級の階級意識を獲得する」ことなので、——こうなると「大衆獲得」してお仕舞いではなくなった。いずれにしてもややこしい話なので、いっそのこと、李初梨には「芸術の武器から武器の芸術へ」を実行してもらい、成仿吾には半租界に居て「十万両の無煙火薬」を蓄積してもらい、私自身は相変わらず「趣

味」を語っていることにしよう。

その後、論争は、李初梨「中国のドン・キホーテの乱舞をご覧いただきたい——魯迅の「酔眼の中の朦朧」に答える」(『文化批判』4号、1928.4.15)、馮乃超「人道主義はどうやって自己を防衛するか？」(『文化批判』4号)、彭康「魯迅を除外するという除外(『文化批判』4号)と展開するが、余りにも感情論になりすぎていて、理論的に取るべきものがないので省略する。

更には、北京から上海に移り住んだ新月派のメンバーが1928年3月に『新月』月刊を刊行したが、胡適(1891-1962)、徐志摩(1897-1931)、聞一多(1899-1946)、梁實秋(1903-1987)などは左翼思想には懐疑的で、梁實秋が「文学と革命」(『新月』1巻4期、1928.6.10)において、革命期の文学はあっても、革命文学はない、文学に階級性はなく、「偉大な文学は固定的で普遍的なヒューマニティーに基づいている」、「ヒューマニティーは文学を計測する唯一の規準」であると主張した。これに反駁し、馮乃超は「冷静な頭脳—梁実秋の「文学と革命」に反論す」(『創作月刊』2巻1期、1928.8.10)において、「人性」には歴史的な任務はなく、文学には階級性があり、「革命期の中の文学、それはどうしても革命文学—プロレタリア文学でなければならない」と主張する。

こうして、「革命文学」論争は後期創造社、太陽社、既成文壇の大御所・魯迅、茅盾と新月派まで巻き込んで論争が展開されたが、1928年9月、馮乃超、李初梨、朱鏡我、李鉄声らが潘漢年(1906-1977)の紹介により、正式に中国共産党に入党(彭康は少し前に既に入党)すると、党宣伝部の命令で、魯迅との論争の禁止命令が下された。このことにより、「この時から、彼らは基本的には魯迅を批判する文章を発表していない」。そこで、論争はまもなく終結した。

#### (b) 「日本無産階級運動発達史」に読み取る日本の無産階級運動の分裂

馮乃超は「馬公越」の筆名で、横瀬毅八「日本無産階級運動発達史」<sup>2)</sup>を『日本社会運動史』<sup>3)</sup>と改題して翻訳、刊行している。編著の体裁だが「目次」を較べると解るが、ほぼ原典の翻訳紹介である。ただ、原典は伏せ字が多く読み

づらいので、伏せ字の多いところは飛ばすか全体の抄訳である。

横瀬毅八は第三章「政治的闘争への転化とその展開」において、山川イズム（解党主義）と福本イズム（セクト主義）に触れている。

1922年7月の日本共産党の創立から、コミンテルン（共産世界党）の反対を押し切ったの1924年4月の自主解党、1926年12月の福本和夫（1894-1983）の福本イズムに基づく党の再建、1927年7月コミンテルン指導の「27年テーゼ」に基づき、12月に新しい党指導部が組織された。『日本社会運動史』の中で特徴的な内容は、日本独自の運動形式である山川イズム（原文：清算派、馮乃超訳：解党主義）と福本イズム（原文：宗派主義、セクト主義）を否定する評価が次のように紹介されていることである。

#### 山川イズム（解党主義）と福本イズム（セクト主義）

- ・ 闘争に踏み込んで発展した正常な路線は、1927年末乃至1928年に始まったものであり、1922年末からの「政治的傾向」が決して一挙に運動をこの段階に到達させたものではない。その間、共産党の倒壊及び解党主義（山川イズム）乃至セクト主義（福本イズム）の時代を経た。即ち路線闘争が最近の発展した正常な状態に回復する以前、その間には運動を遅延させる改良主義の時代が挟まっていた。この闘争の過程——とりわけ革命的コミンテルンの世界政策を放棄した解党主義、運動の遅延を歪曲したセクト主義——はここに叙述されねばならない。（『日本社会運動史』60頁）
- ・ この時期の特徴は労働者農民の自然生長的な革命の高潮であり、理論による政治の誤りにより、自然生長の奔流（とりわけ農民大衆）が無産者前衛（解党主義）をなぎ倒した。党の前衛が極左の指導（セクト主義）を加えたが、その結果様々な政治過失を犯した。具体的に言えば、所謂「合法的無産政党」——改良主義の政治の結成及び分裂し、左右中間三派の対立は理論から政治に進展し、左右両翼への分化抗争が大衆団体＝労働組合に影響を及ぼした——これが運動における解党の段階的な内幕の説明であった。（『日本社会運動史』61頁）

ここで言っている「合法的無産政党」とは、1926年3月に左派が組織し大

山郁夫を委員長とした「労働農民党」、1926年12月に右派が組織した安部磯雄を委員長とした「社会民衆党」、中間派が組織した麻生久を委員長とした「日本労農党」を指す。

山川イズムと福本イズムは日本におけるマルクス主義理論の理解を飛躍的に高めたが、上述したように、一方で、労農運動の組織をはじめプロレタリア文芸連盟などの諸組織の分裂を齎した。そこで、ここで山川イズムと福本イズムとは何かを概観しておく。

山川均 (1880-1958) の山川イズムは、日本のマルクス主義の指導的理論として、1922年に結成したばかりの日本共産党の労働運動の理論に大きな影響を与えた。それは、「無産階級運動の方向転換」(『前衛』1922年7・8月合併号)に掲載の理論に典型され、労働階級の解放は部分的な改良では無意味で資本主義の撤廃によってのみ達成されるので、観念的な革命主義者や階級意識に目覚めた少数先進者は大衆運動との結びつきを重視すべきであるとする「方向転換論」を提唱した。しかし、まもなく山川は日本の条件の下で共産党を結成したこと自体が誤りだったとして、党の解党を主張する解党論の中心となり、1924年に共産党はコミンテルンの許可なくいったん解散する。

一方、福本和夫 (1894-1983) の福本イズムは、1926年12月の日本共産党再建大会において指導理論になった。1924年にドイツのマルクス主義理論家カール・コルシュ (Karl Korsch, 1886-1961) に学んで帰国した福本和夫は、「山川氏の方向転換論の転換より始めざるべからず」(『マルクス主義』1926年2, 5月号)において、マルクスの唯物弁証法的方法により資本主義社会の現実の運動法則を明らかにするとともに、山川イズムを「経済運動と政治運動との相違を明確にしない「折衷主義」であり、「組合主義」である」と批判し、運動を政治闘争に発展させるためには、理論闘争によって「真のマルクス主義意識」を獲得し組合主義や折衷主義から「分離」することこそ前衛党の建設だとして、理論闘争と政治闘争の必要を説いた。

1927年7月、ブハーリンの指導するモスクワのコミンテルンの下した「日本問題に関する決議」(27年テーゼ)により、山川均と福本和夫を両翼とする理論がいずれも否認されると、日本共産党は同テーゼを受け入れ、山川イズム



を「解党主義」、福本イズムを「セクト主義」の間違いとして清算し、以後日本共産党はコミンテルンの指導の下で正統派のマルクス主義の位置を与えられることになる<sup>4)</sup>。

馮乃超は同床異夢の社会主義、共産主義を目指した日本の知識人がセクト主義的な無産階級運動に陥った現実を実際の日本社会に見出していたのだが、帰国後の彼及び彼ら後期創造社メンバーは、むしろ、マルクス主義に「革命」性を見出した前衛的な福本イズムの理論に共感を示しながら、当面（おそらく1934年頃まで）は中国共産党宣伝部とも連携して、後期創造社の運営に携わって行くのだと、筆者は認識する。

## (2) 「本物のマルクス主義」以前の多様なマルクス主義理論容認の時代

李江は「馮乃超年譜」の中で、1990年代の中国共産党政権下の歴史的価値観から1926年へと歴史を遡り、「馮乃超が回想したのは：日本語、ドイツ語でマルクス・レーニンの書籍や、ブハーリン、トロツキーの書籍を読むなど、本物と偽物のマルクス・レーニン主義を見極めることができず、同時に一時隆盛した福本イズム（福本和夫の理論体系）の“左”派思潮の影響をやや深く受けたのは、中国革命に対する実際の認識に欠けていたからである」<sup>5)</sup>と分析している。

要するに、後知恵としての歴史観に照らせば、ソ連共産党中央委員会政治局員の一人であったレフ・トロツキー（Lev Trotsky, 1879-1940）も、マルクス主義の優秀な理論家としてレーニン（Vladimir Lenin, 1870-1924）から評価されたニコライ・ブハーリン（Nikolai Bukharin, 1888-1938）もマルクス・レーニン主義の「偽物であり」、まして「福本イズム」などは「本物の」マルクス主義理論などであるはずはなかった。

馮乃超は「日本馬克思主義理論書籍」（『文芸講座』第1冊、上海・神州国光社、1930.4、313-318頁）の冒頭、次のように紹介する。

1924年日本の無産階級運動は自然成長の闘争から始まり目的意識のある闘争へと転じた。無産階級の運動は日一日と発展し、過去の無組織の闘争では労働者

たちの徹底的な解放はできないことを知り、労働者たちを種々の古い支配的観念から解放しなければ、革命の成功を促進できないことも知った。そこで、文化領域でも漲る勢いで無産階級文学運動が開始した。日本の文学は六、七年来の自然成長的なプロレタリア文学から目的意識のあるプロレタリア文学運動へと転換したので、私たちもまた時々刻々と発展するこの運動を指導するマルクス主義芸術理論の書籍を探し出すことができた。(313頁)

この後、馮乃超は、「マルクス主義理論」を理解するのに役立つ書籍として13冊を挙げ、その他に鹿地亘(1903-1982)と林房雄(1903-1975)などの単行論文を数編挙げる。13冊の書跡を彼の行論の順に示すと次の通りである(括弧内は筆者)。

1. 平林初之輔『無産階級の文化』(東京・早稲田泰文社、大正12(1923)年1月、339頁)
2. 武藤直治『文学の革命期』(東京・弘文館、大正12(1923)年7月、100頁)
3. 宮島資夫『第四階級の文学』(東京・下出書店、大正11(1922)年3月、174頁)
4. 小牧近江『プロレタリア文学手引』(東京・至上社、大正14(1925)年10月、149頁)
5. 片上伸『文学評論』(東京・新潮社、大正15(1926)年11月、362頁)
6. 青野季吉『解放の芸術』(東京・解放社、解放群書第2編、大正15(1926)年4月、209頁)
7. 青野季吉『転換期の文学』(東京・春秋社、昭和2(1927)年2月、464頁)
8. 青野季吉『マルクス主義文学闘争』(東京・神谷書店、昭和4年(1929)年12月、451頁)
9. 蔵原惟人『芸術と無産階級』(東京・改造社、昭和4年(1929)年9月、313頁)
10. 中野重治『芸術に関する走り書』(東京・改造社、昭和4年(1929)年9月、322頁)

11. 勝本清一郎『前衛の文学』（東京・新潮社、昭和5（1930）年1月、392頁）
12. 田口憲一『マルクス主義と芸術運動』（東京・白揚社、昭和3（1928）年7月、435頁）
13. 山田清三郎『日本プロレタリア文芸運動史』（東京・叢文閣、昭和5（1930）年2月、313頁）

この中、馮乃超が特に注目するのは、上記1. 平林初之輔（1892-1931）、6、7、8. 青野季吉（1890-1961）、9. 蔵原惟人（1902-1991）、10. 中野重治（1902-1979）、11. 勝本清一郎（1899-1967）の五人の著書である。

この五人は、コミンテルン（Komintern）のニコライ・ブハーリンの1927年「日本問題に関する決議」により批判された福本イズムと山川イズムを支持した平林初之輔と青野季吉の「文芸戦線派」と、コミンテルンの命令に従い27年「テーゼ」を受け入れた蔵原惟人、中野重治、勝本清一郎の「戦旗派」の二派に分けられる。この二派を代表する五人の著作に関して、馮乃超は「この運動の発展を指導するマルクス主義芸術理論の書籍」と評して、日本における多様なマルクス主義理論あるいはマルクス主義文芸理論の解釈のあることを紹介している。

そこで次に、五人の著作における馮乃超の評価を示し、彼が日本におけるマルクス主義理論の解釈には色々なバリエーションがあることを実感しながらも、馮乃超が蔵原惟人、中野重治、勝本清一郎の「戦旗派」（コミンテルン支持派）に好意的であったことも同時に概観しよう。

#### 平林初之輔『無産階級の文化』

馮乃超は、『無産階級の文化』について、これは平林の初期の著作で、「本書でプロレタリア文学の必然性および階級性などの問題に言及しており、（このことは）現在日本ではすでに当然の歴史的記録であるのだが、現在も依然として『芸術に階級はあるのか』と尋ねる大学教授のいる中国では、すばらしい参考書といえよう」と評するあたり、明らかに梁実秋（1903-1987）を揶揄している。

### 青野季吉『解放の芸術』『転換期の文学』

馮乃超は、「青野の二冊（『解放の芸術』と『転換期の文学』）は初期の日本プロレタリア文学運動においてブルジョア階級文壇に対する攻撃を描いており、かなり重要な価値を有する。しかし、科学的成果というよりは寧ろ Journalism の産物と言えよう」と評価する。そして、全体として「日本の無産階級文学に基礎的な労作を打ち立てたが、方法論としては必ずしも純正なマルクス主義の科学的検討はしていなかった」と評している。

### 青野季吉『マルクス主義文学闘争』

青野の三冊目の『マルクス主義文学闘争』について、馮乃超は次のように評価する。

1927年に日本のプロレタリア文学陣営内部が思想対立により戦旗派と文芸戦線派の二派に分裂した。戦旗派は最近もう一度改組され日本無産階級芸術連盟（内部で作家連盟、演劇連盟、芸術連盟、音楽連盟、映画連盟の組織に分かれる）となったが、文芸戦線派は相変わらず以前の基礎に留まり、社会民主主義者の追隨者（政治では、彼らは合法主義者の大山郁夫などの新労農党を擁護した）に変わった。そこで、この論文集の中に所収される文章の多くは社会民主主義者の自己弁護の代物である。大いに一部は参考用に供することができる。（315頁）

上記、「日本無産階級芸術連盟」は正確には「全日本無産者芸術連盟」（NAPF、ナップ）で、ナップの機関紙が『戦旗』で、内部の組織は「連盟」ではなく「同盟」である。馮乃超にプロ芸、ナップ、コップの組織の分裂や設立をめぐる説明に多少の混乱があるのですこし整理しておく。

1927年の分裂は、6月に日本プロレタリア芸術連盟（プロ芸）から青野季吉、蔵原惟人らが脱退し、労農芸術家連盟（労芸）を組織、機関紙『文芸戦線』とし、11月にさらに蔵原惟人らが脱退し、前衛芸術家連盟（前芸）を組織、機関紙『前衛』である。1928年4月にプロ芸と前芸が統一してできたのが全日本無産者芸術連盟（NAPF、ナップ）で、さらにナップが蔵原惟人を中心にプロレタリア文化運動（文学、演劇、美術、映画など）を推進して1931

年11月に結成されたのが日本プロレタリア文化連盟（KOPF、コップ：作家同盟、演劇同盟、映画同盟、美術同盟、音楽家同盟、写真家同盟など）で、機関紙を『コップ』と『プロレタリア文化』とした。

大山郁夫（1880-1955）らが「新労農党」を結成したのが1929年11月、本文掲載の『文芸講座』第1冊の刊行は1930年3月なので、馮乃超がこの文章を書いていた1930年初頭前後に存在していたのは、自らを社会民主主義的団体と規定した労農芸術家連盟「文芸戦線派」と全日本無産者芸術連盟「戦旗派」であったことは間違いないが、「戦旗派」はまだ「コップ」には改編されていない。

#### 蔵原惟人『芸術と無産階級』

この本の中の論文はすでに多くが中国語に翻訳されている。マルクス主義の方法で芸術を批評しており、本書は重要な著作である。

#### 中野重治『芸術に関する走り書覚え書』

中野と蔵原はともに戦旗派の理論的な指導者である。もし蔵原が学者であると言うなら、中野は政治家である。しかしながら、彼らはともに文化工作での戦士ではあるが、彼らの作文と問題解決の態度から上述したような違いがあると言えよう。蔵原の論文は大変周到で、中野の論文は運動における方法論に富んでいる。そこで、本書は当然すばらしい参考書である。

#### 勝本清一郎『前衛の文学』

日本プロレタリア文学運動が進展する中、新たに「文学大衆化の問題」が発生し、この問題にも中野や蔵原が論文の中で解決を示していたが、もう一つの新たな問題を平林初之輔が引き起こした。それは、「プロレタリア文学の芸術的価値」に対する問題であり、馮乃超は勝本の同書の意義を次のように指摘する。

1929年3月平林は雑誌『新潮』に「政治的価値と芸術的価値—マルクス主義文学理論の再吟味」なる一文を以て、正式にプロレタリア文芸理論へ挑戦した。……（中略）……当時、資産階級の文芸批評家も形式主義の文学理論を提示して平林の意見を擁護したが、極力反撃を加えたのは勝本清一郎だけであった。この

一点から勝本が本書に収集した論文は大変参考に値する。(317頁)

本書所収の論文で「芸術的価値とは、社会的価値の一種である」といい、芸術的価値というものを全く解消した勝本に対し、平林は上述引用の論文で「政治的価値と芸術的価値とは遂に「調和」し得ないと私は信ずるのである。両者を統一する芸術理論はあり得ないと信ずるのである。マルクス主義文学理論は両者の統一ではなくて、政治的価値に芸術的価値を従属せしめ、これをそのヘゲモニーのもとにおかんとするものである。両者は力で、権威で結合せしめられるのである」とする二元論的懐疑を勝本に投げかけている。これに対する勝本の答えは「平林氏が芸術性に関する条件を予め動かないものとして念頭に置いて見てゆかれるからである」として、一元論正当性の水掛論を展開する。

以上のように、馮乃超は日本の都市部、特に東京における社会主義運動、無産階級運動をめぐる様々な運動団体が乱立し、マルクス主義理論の解釈をめぐる様々な見解が存在する状況を目の辺りにしていた。

馮乃超が1927年10月に上海に渡った時期、日本では、1927年7月にモスクワのコミンテルンの指導の「日本問題に関する決議」(27年テーゼ)により、多様性のある解釈を許したマルクス主義理論の容認の時代から、コミンテルンの指導による「本物のマルクス主義」「正統派のマルクス主義」を歩む時代へと突入した。

一方、中国では、ソ連でスターリン死後から発生しフルシチョフ (Nikita Khrushchev, 1894-1971) の「スターリン批判」(1953-1956) に反対した時期をピークに、中ソ対立が表面化する1960年初頭から文化大革命が終結するまでの時期において、毛沢東思想の源流にある「聯共(布爾什維克)党史簡明教程」(1939)の中国語訳版で明記されるマルクス・レーニン主義を継承するスターリン主義のマルクス主義が「本物のマルクス主義」「正統派のマルクス主義」であったであろうと判断されることが、後知恵としての歴史を可逆的に眺めたときに導きうる結論であろう。

しかし、都市部と都市部でも、まして都市部と農村部ではまったく違う広大な土地の中国で、しかも、日中戦争、国共内戦による混乱の時代と同時代にお

いて、「正統派のマルクス主義」が何であるかを議論し、それを教科書として浸透させることは不可能であり、1928年から1949年までの中国においては、馮乃超が日本で受容した「大正主義」の精神も、マルクス主義の多様な理解も、まだ有効性のある時代であったと考えられよう。

1927年10月に上海に渡った馮乃超が、同年7月にモスクワのコミンテルンの指導の「日本問題に関する決議」(27年テーゼ)により、日本が多様な解釈を許したマルクス主義理論の容認の時代から、「本物のマルクス主義」「正統派のマルクス主義」を歩む時代へと突入したことを知るのは、恐らく鹿地亘との出会いを待たなければならないだろう。

## おわりに

1928年9月、中国共産党に正式に入党した馮乃超は1930年の左翼作家連盟成立以降、日中戦争期終結までの時期をどのような行動を執って過ごしていたかを李江「馮乃超年譜」から概観しておく。

- ・1930年3月2日、中国左翼作家連盟が上海で成立し、大会では馮乃超が起草した『理論綱領』が大会を通過し、並びに中共党団体書記兼宣伝部長に選出される。
- ・1931年2月、馮乃超は潘漢年の後任として、中共中央宣伝部文化工作委員会(略称「文委」)書記に就任、「左連」の内部の各左翼文化団体が組織した中国左翼文化総同盟(略称「文総」)の書記を兼任した。
- ・1932年初、馮乃超は中共中央特科成員の身分(特務、「馮子韜」という偽名)で国民党湖北省政府委員兼建設庁庁長として赴き、辛亥革命時の重臣李書城(馮乃超の岳父、中共一大は彼の自宅で開かれた)の部下として仕事し、党の情報工作を行った。彼は毛沢東が指示した白区(国民党区)に留まった数多くの共産黨員の一人である。
- ・1937年7月、全面的に抗日戦争が勃発すると、馮乃超は党の抗日民族統一戦線の工作に積極的に身を投じ、武漢で文化界抗敵工作団を組織し、『戦闘』旬刊などの刊物を創刊すると共に、武漢文化界抗敵協会を組織した。
- ・1938年初、馮乃超らは周恩来の指示に基づいて、中華全国文芸界抗敵協会を

組織すると共に、臨時計画準備会の書記を担当、『中華全国文芸界抗敵協会簡章』を執筆、起草した。同年春から夏にかけて、国民政府軍事委員会に政治部が成立すると、陳誠が部長となり、周恩来が中共代表として副部長となり、郭沫若が第三庁庁長となり、馮乃超は第三庁中央特支の書記となり、並びに子供劇団を党組織として管理することを任された。その間、馮乃超は日本人反戦作家の鹿地互が組織した日本人民反戦同盟の活動を指導し支持した。

- ・ 1940年10月、第三庁は国民党によって撤回させられて、文化工作委員会が成立し、馮乃超は「文工会」の中国共産党内の書記に就任した。
- ・ 1942年、中共中央南方局に文化工作委員会が成立すると、馮乃超は委員として、引き続き文化戦線を指導した。
- ・ 1945年12月、馮乃超は中国共産党中央に周恩来をリーダーとする政治協商会議に中共代表団顧問として参加するように指示され、周恩来らと一緒に国民党と真正面に向かい合って通商交渉を行った<sup>6)</sup>。

また、馮乃超の長女馮真の娘李丹陽氏は外祖父の家に残された資料、写真を利用して抗日戦争中の馮乃超と鹿地互の関係を「馮乃超与在華日本人反戦同盟会長鹿地互」<sup>7)</sup>という一文に纏めているが、その中、日本人捕虜と政治部の幹部の日本語を如何に教育したかについて、次のように語っている。

1938年8月、鹿地互は（共産党）軍事委員会に日本軍捕虜に対する感化教育を行う収容所を設立することを建議した。以後、湖南、広西、四川、貴州にこのような収容所が次々に設立され、また、収容所は「和平村」と称された。鹿地互は収容所で講義を行うと、よく日本軍捕虜と談話し、彼らに中国抗戦歌曲『長城謡』の内容をかみ砕いて教えていた。辛抱強い説得を経て、熱狂的な軍国主義者たちは反ファシスト戦士へと教育された。

武漢陥落前夜、鹿地互夫婦は三庁のメンバーたちについて湖南へと撤退した。長沙が大炎上する中、彼らは馮乃超らと危険を脱し、いっしょに車で衡陽に赴いた。程なく、貴州、広西へ転々とした。1939年初、周恩来の指示を得て、馮乃超は政治部の名義で桂林で日本語政治幹部短期講習学校を計画実施した。鹿地互



は馮乃超に教材、科目などを十分に準備し計画する手助けを行い、更に、その学校の特別教官となり、各抗戦部隊から引き抜いた青年士官の養成を行った。桂林の時期、二人（馮乃超と鹿地亘一筆者）は本当の兄弟のようだった。

また、鹿地亘自身も馮乃超との関係、彼の人柄を次のように語っている。

馮乃超は、実は私と同期の東大文学部の卒業生で、帰国してのちは郭氏（郭沫若一筆者）らとともに創造社の運動を創立した革命的な詩人であるが、今日では彼を詩人として知つてゐる者は、むしろ少い。長期にわたる困難な闘いがいかに強堅い不屈の頼もしい革命的戦士を鍛え上げてゆくかの最もよき実例がこの戦争中における彼である。武漢で初めて私たちが再会した時に、私は彼に、おおらかで抱擁力にとむ、しかしまだ弱々しさを免れぬ「文化幹部」を見出した。だが、以来、私たちは大移動から始まつて、ついに抗戦の八年を通じ一日も離れない兄弟のような関係で結ばれたのだが、その間に、彼は一日一日と鍛えられていった。大移動をするにあつても、彼はその計画実行の主要な責任を負い、へとへとになつて活動しつづけた。私が感服したのは、彼がへとへとになつても不平をいつたことがなく、顔色を動したことがなく、あらゆる人々の相談相手になつて、倦むことなく耳を傾け、説得し、行動しつづけたことだ。彼は実に忍耐づよく闘つた。のちに——殊に反動期に入つてからの重慶で、多くの人々が狼狽し、あるいは絶望に陥りがちであるなかで、彼は常に千年一日の落ちつきをもつて、よく文化界の元締めとしての仕事をなしとげていった。彼は持久戦が生み、持久戦が育て上げたすぐれた組織者としての人格者の典型であつた。彼はすべての同志から愛され、敵からさえ敬服された<sup>8)</sup>。（鹿地亘『中国の十年』95頁）

最後に、本稿の第3章以降の論述を念頭に、魯迅が看取した「階級性」と「人道主義」の問題の所在を確認しておく。

中井政喜は「魯迅は、馮乃超からの自分に対する人道主義批判をきっかけに、魯迅訳・ルナチャルスキー著の「芸術と階級」（所収『芸術論』）、「トルストイとマルクス」（所収『文芸と批評』）、瞿秋白訳・ルナチャルスキー著『解

放されたドン・キホーテ』などを通して、トルストイ主義のような無抵抗な人道主義も、キホーテのようなその時その場の個人的善意の人道主義も本当の人道主義ではなく、人道主義の理想は将来の社会主義・共産主義で実現することだと知った<sup>9)</sup>と指摘していた。すなわち、魯迅は、各種のマルクス主義理論や文芸論を翻訳する中で、文学には階級性のあることを、人道主義は階級格差のなくなった社会主義・共産主義の世の中で実現されると考えたようである。

長征後の1935年12月に抗日民族統一戦線の樹立に伴い、1936年春文芸界抗日民族統一戦線を作るために、モスクワのコミンテルン（第三国際、共産国際）の指示を受けた王明が左聯を解散させている。魯迅などは解散に反対していた。中共中央の指示で創ったものは、中共中央の指示で壊している。

そこで、「革命文学」の時代とは、広義には毛沢東時代を越え現在までも継続または復活しているものだと、筆者は考えている。なぜなら、現在の中国が共産党一党独裁の社会であるにも関わらず、貧富の差を筆頭に各種格差が歴然と存在するからである。

馮乃超や李初梨が理解する「革命文学」とはプロレタリア（無産階級）文学と同意義である。彼らは、(1)文芸は時代思想を反映すべきであり、それ故に文芸は宣伝であること、(2)プロレタリアート（無産者）は自己の文芸を作るべきであること、(3)プロレタリア文芸は出身階級ではなくプロレタリア精神を獲得した者によって実現されること、(4)自己の所属する小資産階級精神を克服し、大衆の中へ向かい、思想戦線の一翼を担うべきことを、主張している。

曾てナチャルスキーが、「人道主義を批判的に継承し発展させるべきものであり、それは人道主義の理想が将来の社会主義・共産主義の社会で実現するものである」と考えたが現実の社会主義・共産主義の社会では実現されていないのと同じように、馮乃超たちが主張したこれらのプロパガンダはプロレタリア独裁であるはずの現在の中国でも有効であるように、筆者には感じられる。

## 注

- 1) ・陳芳明編選『張深切』国立台湾文学館、台湾現当代作家研究資料彙編52、2014.12、53-54頁  
・康来新、許秦泰編選『劉呐鷗』国立台湾文学館、台湾現当代作家研究資料彙編

53、2014.12、43-44頁

- 2) 横瀬毅八「日本無産階級運動発達史」上・下(『馬克思主義講座』12巻・13巻、河上肇・大山郁夫監修、政治批判社編輯、馬克思主義講座刊行会(上野書店内)、1928.12・1929.3所収)
- 3) 馬公越編『日本社会運動史』上海・滬濱書店、1929.10初版

目次

例言 1929年6月18日作

- 一. 日本無産階級運動の前史
  1. 由日中、日俄戦争至明治末葉
  2. 大正元年至大正六年(1912-1917)
- 二. 無産階級運動の勃興
  1. 経済的鬥争—工会運動之勃興(1918-1920)
  2. 一九二零—一九二二年前半の状態
- 三. 向政治的階級鬥争之転化及其展開
  1. “政治的傾向”及左右両翼之分化(1922-1925)
    - a. 無政府主義者没落和日本共產党的創立
    - b. 日本労働総同盟の分裂及農民労働党的創立
  2. 所謂“合法的無産政党”—改良主義政党(1926-1927)
    - a. 由労働農民党的成立及其分裂至第一回党大会
    - b. 諸“合法的無産政党”之対立及發展
- 4) 関幸夫『山川イズムと福本イズム』(新日本出版社、1992.11)の解説を中心に、フランク・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典』(東京・ティビーエス・ブリタニカ、1996.12)などの工具書で補い、筆者が整理した。
- 5) 李江「馮乃超年譜」『中国現代文学史資料彙編(乙種) 馮乃超研究資料』(陝西人民出版社、李偉江編、中国現代作家作品研究資料叢書、1992.3) 92頁
- 6) 李尚徳主編『黙黙の播火者・馮乃超伝略』(中山大学出版社、馮乃超百年誕辰紀念文集、2001.9) 4-6頁
- 7) 李丹陽「馮乃超与在華日本人反戦同盟会長鹿地互」歴史学博士・中英文化交流学会常務理事、写於2015年9月、京都大学人科学研究所の石川禎浩教授より資料提供を受けた。
- 8) 鹿地巨『中国の十年』時事通信社、1948.3、95頁
- 9) 中井政喜「第八章 ルナチャルスキーの人道主義」『魯迅後期試探』(名古屋外国語大学出版会、2016.10)の要点を筆者が整理した。